

第8期 第2回 静岡市行財政改革推進審議会 会議録

1. 日 時 平成30年10月16日(火) 9:30~12:00

2. 場 所 静岡庁舎本館3階 第3委員会室

3. 出席者 【委員】

田形和幸会長、岩井泰次郎委員、植田眞委員、内山和俊委員、
小泉祐一郎委員、小島孝仁委員、坂野真帆委員、杉山茂之委員、
鈴木貴子委員

【行政】

田辺信宏市長、大長総務局長、吉井総務局次長、三宅総務局参与、
吉永総務課長

〔事務局〕

遠藤総務課行財政改革推進担当課長、上原副主幹 外

4. 会議内容

- (1) 開 会
- (2) 審議会への諮問
- (3) 諮問事項に係る委員と市長との意見交換
- (4) 移動(登呂遺跡へ)
- (5) 現地視察
- (6) 移動(静岡市役所へ)
- (7) 閉 会

審議会内容は以下の会議録のとおり

≪略：審議会への諮問≫

事務局：田辺市長と委員の皆様との意見交換に移る。

田辺信宏市長：まず、それぞれ大変お忙しい立場であるにも関わらず、今期の行革審の委員をお引き受けいただいたことに、行政を代表して厚く御礼申し上げます。それぞれの専門、あるいはご経験を活かしていただき、ぜひ貴重な答申を仕上げていただきたい。私の問題意識を簡潔に説明する。これまでの行財政改革はマイナスをゼロにしてきたが、私が就任

をしてからは、ゼロからプラスにする行財政改革をしていきたいと考えている。これまでのマイナスをゼロにするというのは、例えば市の職員の人数を減らして人件費を削るといようなものだ。失われた20年とも言われたが、民間もデフレで厳しい時代だったので公務員に対してとても厳しい視線が向けられた。したがって、行財政改革についてはコストカッターの役割を期待されてきた。しかし、様々な経済成長に伴い、公務員に対するバッシングという民間の厳しさが少しずつ弱くなり、むしろ、厳しい時代だから防災にはきちんとお金を使ってほしい、子育て支援をきちんと実施してほしいという声も出てきて、官民連携をキーワードに官と民が同じ方向を向いてまちづくりの実現ができるような体制、社会環境が整いつつある。財政はかなり厳しい状況であり、市の職員が直球で100%の公共サービスを市民に提供するという時代ではなくなっている。公共的なミッションが民間事業者にも問われ、官民連携で公共サービスを提供しようという方針を打ち出すことで、民間の知恵やノウハウを生かした連携を意識している。コストカッターとしての行革審ではなく、ゼロからプラスの、政策の費用対効果を民間の力を活用して高めていくような提言をいただき、それを行政に還元していきたい。前期の行革審で静岡ガスの岩崎前会長がその道を開けていただいた。例えば駿府城公園におでん屋がオープンしたが、都市局の管理下にあった公共施設を規制緩和してそういうルートを作った。あるいはお堀の観光資源化に向けて葵舟を浮かべ、来月の大道芸ワールドカップの時にも実証実験を行う。これも行革審での提言に基づいて規制緩和を議会に認めていただいたものだ。地域資源はたくさんあるが、さまざまな制約でできないことがある。行政は利益を生むことよりも前に法律を守ること、コンプライアンスが先に立つ。それがいかに時代遅れの法律であっても、ルールはルールなのでそれに従うと、これも出来ない、あれも出来ないということになる。そういうものを取っ払えば、こんなにクリエイティブなこともできるのではないかと、そういう提言をいただきたい。今回私が諮問の素材として皆さんに提示したのが、歴史文化資源の有効活用だ。これから3年後に青葉小学校の跡地に歴史文化ミュージアムが供用開始になる。これは、「今川」「徳川」「東海道」の3つのキーワードで静岡の歴史をお客さんに見せる、フラグシップとなる施設だ。その3年後を見据えて、今は静岡市に点在していてバラバラに運営している歴史文化施設を、それぞれの特徴を掴みながら、それぞれの館をレベルアップした上でネットワーク化する。フラグシップのここを一つの拠点として、例えば、由比の広重美術館と連携してみる、あるいは民間との協力も必要で、鈴与グループが支援しているフェルケール博物館など、そういうさまざまなところをネットワーク化することによって相乗効果を生み出す。そして、今回ひとつの突破口として登呂遺跡がある。戦後、総合的な発掘調査が行われ、全国的な考古学の話題になってたくさん賑わったところだ。しかしその後、違う場所でも他の遺跡が発見されて、その賑わいはだんだんと減っていった。本日は登呂遺跡、登呂博物館、芹沢美術館を視察していただく。ここをもっと一体化して効果を高め、交流人口の拡大に貢献できるような施設にしていきたい。総務局長が前の駿河区長であるため、登呂遺跡に思い入れもあると

思う。登呂を一つの切り口にして、ゼロからプラスにする行革審、つまりクリエイティブで、政策の生産性を上げ、費用対効果を高めることによって結果的に行財政改革につながるような議論をぜひお願いしたい。委員には実務家の方々に意識的に就任をお願いした。企業経営をされている中でいろいろな苦勞もあると思うが、行政を指南していただき、さまざまな意見を伺えればと思っている。そのリード役としてしずおか信用金庫の田形理事長にお願いする。新しい行革審に大いに期待をして、今回の諮問をさせていただくので宜しくお願いしたい。素材の提供等々は事務局の方で、皆様の議論がみずみずしくなるように、下支えの努力をさせていただく。どうぞ宜しくお願いしたい。

小泉祐一郎委員：今日は私の実家のある登呂5丁目に視察に来ていただくのでありがとうございます。市長の話にあったように、行政改革から行政経営の視点で、政策の費用対効果、効率性を実証的に議論し、まちづくりを策定していくということで、田形会長を始めとして素晴らしいメンバーが集まっていると思う。特に今回のテーマに関して、文化資源を地域の経済の活性化に結び付けるということが、答申の一つのポイントだと思っている。ぜひ知恵を出していきたい。文化施設そのものも重要だが、文化施設の周辺にどれだけ民間の商業施設や観光施設があり、経済波及効果に結び付けるかが重要だと思っている。静岡県全般に言えることだが、施設に観光客の方が来ても、トイレは使うが、その周辺であまりお金を使わないで、また次の施設に行ってしまうことがあると思っている。登呂遺跡の近くにやまだいちさんの店舗がある。やまだいちさんは以前はもっと大々的に経営されていたが、いまは縮小して頑張っておられる。そうした民間の方が登呂遺跡の周りで商売をやってみようかと思うような、そんな方向で良い知恵が出せればと思っている。

田辺信宏市長：小泉委員は昨年まで県庁職員でいらっしゃった。行政マンから華麗なる変身を遂げた。

岩井泰次郎委員：たまたま昨日、各地でさまざまなパブリックリレーションズの教鞭をとっている殿村さんの話を聞く機会があった。私も印刷業という関係上、広報・PRの仕事をしている。今の主流というか大きなウェイトを占めるのはSNSだ。個人の発信力、これが非常に強い。お金をかけてテレビコマーシャルをどんどん打つのではなく、インフルエンサーという非常に影響力の強い発信者を使って周りを促してもらおう。登呂遺跡以外にもネットワーク化するということだが、ある程度ポイントが決まっていたら、ぜひ予算を付けてそういう影響力の強い方たちを静岡に招聘し、その方々の意見を聞いてみるのも手ではないか。我々は生まれも育ちも静岡だが、我々も見えないようなところを発信していけたらいいと思う。

田辺信宏市長：行革審というのは数ある審議会の中でも別格で、重みもあり、伝統のある審議会である。ここでの答申は議会にも影響を与える。予算付けには非常に加味しやすい。ぜひクリエイティブな大胆な答申をしていただけたら嬉しい。静岡市も殿村美樹さんにPRをお願いしている。静岡市はPRが弱い。いいものはたくさんあるのに、広報、情報

発信力が弱い。それに対してPRを強化する。殿村さんは「うどん県」「ひこにゃん」「今年の漢字」などさまざまなブームを仕掛けたPR戦略の第一人者だ。そういった広報もうまく使ってもらいたい。

小島孝仁委員：海外から、また日本全国から日本人のお客さんも来ていただいているなか、伊豆や富士山、浜名湖のうなぎパイファクトリー、あるいは寸又峡に行くという話は聞くが、登呂に行くという話は聞かない。どうすればいいのか、必ずやり方はあると思うから、それを今日はしっかり見てきたい。

田辺信宏市長：用宗地域では、持舟城という歴史文化資源を磨いて世に出していくという市民の活動がある。いろいろと知恵を貸していただきたい。

坂野真帆委員：社会教育委員をやっていた時に登呂博物館の式典があり、明治大学の大塚先生がご講演されて、戦後で日本中が意気消沈していた時に登呂遺跡の発掘に携わり、水田跡や高床式倉庫の跡が発掘されて、日本中の意気が上がった時の感動が忘れられないというお話をされた。そういうことはすごく大事だ。私が観光に携わる中で、感情が動くこと、何かをすることを勉強するのではなく、心持ちを変えようということに注力している。そのエモーショナルなことが登呂遺跡にあると考えると、登呂遺跡の本質をもう一度見直してみるものが大切だ。何が価値なのかが分からないと情報発信するのも難しい。その辺りもこれから考えていきたい。

杉山茂之委員：私どもの企業で戦略のことを考えた時に、やはりKGIが重要で、だいたいどのくらいのゴールを目指していくかによって予算のかけ方や戦略を検討していく。今はまだ現状値のデータがないが、どのくらいの観光客を未来に増やしていくか、あるいは目指す姿によって戦略も違ってくる。ある程度ゴールのイメージを共有化し、皆さんにご意見をいただきながら、議論を進めていきたい。

鈴木貴子委員：ちょうど2日前に、海外の方から、来月中旬に広重美術館と登呂遺跡、ドリプラに1日観光に行きたいという相談の連絡が来た。今年の6月に南米で静岡茶のプレゼンをした際に関心を持っていただいたこともあるが、やはり情報をしっかり伝えることによって、海外の方も広重だけではなく登呂遺跡まで関心を持っていただけるのだと感じた。ただ、問題となるのは足だ。外国人の方はたくさん荷物を持っているので、どうやって行けばいいのか、交通手段は重要な問題だ。日本人の観光客の方も同じだと思う。小泉委員がおっしゃったように、登呂遺跡に行っても、他に周りに何もないとあれっと思ってしまう。もっと集客のための工夫が必要だ。いま市の委員をやっていることを周りの同世代に話すと、市長に言いたいことがあると言われる。前に女性参画、男女共同参画のことをおっしゃっていたが、20代、30代、40代の女性の声を率直に吸い上げる場をもう少し設けていただくと嬉しい。今朝の新聞にインバウンドの客船誘致の話があった。先週官公庁に行く機会があったのだが、昔商船三井の客船に乗っていた時の上司がいま官公庁の偉い人になっていて、いろいろとインバウンドのことを話していた。皆さんといろいろと情報を共有しながら、世界に輝く静岡市をつくっていくことに貢献したい。

植田眞委員：鈴木委員がおっしゃったように、足だと思う。サイクルもあるしシェアカーもあるし、乗り合いバスの循環という手法もある、そのあたりを検討してもらいたい。私の感覚からすると登呂は少し離れている。登呂だけでなく、周りのいろいろな観光施設とのネットワークということについて、もちろん情報のネットワークも必要だが、足のネットワークについても検討が必要だと思っている。

内山和俊委員：昨日、臨濟寺と浅間神社の八千戈（やちほこ）神社の一般公開があって見に行ったが、かなり賑わっていた。やはり価値のあるものは多くの人々が注目していると感じている。私は観光ボランティアガイドをやっていて、駿府匠宿にもよく立つ。そこの支配人が言っていたが、いま匠宿一館だけではどうにも客は呼べない。5つ、6つ程度の他の施設と連携して匠宿に寄ってもらう、そういう関係が必要だと言っていた。歴史の関係だと、観光ボランティアガイドの意見として、地元の小学生や中学生にもっと静岡について勉強してもらいたいという意見が多い。

田辺信宏市長：匠宿にもぜひ視察に行ってもらいたい。アスティの中に駿府楽市という店があるが、私とその企業の社長を務めている。そこで匠宿の運営もやることになっているが、ものすごく経営の重荷になっている。何とかしなければならないということで、匠宿を切り離して、経済局でどうやったら匠宿として運営ができるのかという議論が始まっている。一度匠宿もぜひご覧になっていただきたい。

田形和幸会長：史跡については、私どももさまざまなお客様とお会いするが、特に県外からのお客様から史跡はどこに行ったらよいか尋ねられることがある。静岡では、ガイドブックなどがありませんねと言われる。具体的には、最近来たお客様から、「桜の時期にはこういう名所があると、パンフレットが作って置いてある駅もある。しかし、静岡で紅葉の時期にはどこに行ったらよいか、寸又峡以外の例がなかなか出てこない、いまはそんな状況だろう」と言われた。民間もいろいろなところにお金を出すことは全然惜しまないと思う。そういう中で官民共にウィンウィンの関係になればいい。皆様のご意見を踏まえて、歴史を中心にどういう形でやれるか、これから考えをまとめていきたい。

事務局：時間となったので、以上で意見交換を終了し、市長はここで退席とさせていただきます。これより登呂遺跡へバスで移動する。

《略：現地視察》

静岡市行財政改革推進審議会

会長 田形和幸